Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

八幡縁起絵巻諸本の所在とその相違点

田中，水萌

(Citation)
美術史論集,15:137-154

(Issue Date)
2015

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010467

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010467

八幡縁起絵巻諸本の所在とその相違点

《キーワード》応神天皇、神功皇后、住吉明神

田中水萌

はじめに（概要）

現在、八幡縁起絵巻[1]と称される絵巻には大きく二種類ある。一つは神功皇后と住吉明神による三韓征伐、応神天皇誕生、八幡神の示現譚と各地への勧請を描いたものであり、一つは応神天皇の崩御、応神天皇陵・神社の建立、諸人の参詣を描いたものである。前者は類本が多く「八幡大菩薩御縁起」、「八幡宮縁起」、「八幡の本地」等様々な名称で後世に伝えられている。後者は、現存作品としては誉田八幡宮所蔵の「誉田宗廟縁起」と東京国立博物館所蔵の残欠本のみである。本論では前者の内容を描いたものを八幡縁起絵巻の類、後者を誉田宗廟縁起の類とし、前者を対象とする。

八幡縁起絵巻の場面構成は基本的には以下のようになる。

（一）仲哀天皇、新羅国より襲来した塵輪を射殺するも、自らも流れ矢に当たり崩御する（後述甲類本、乙類本のうち乙類本のみ）

（二）神功皇后、仲哀天皇の遺勅により三韓に出征、途中老翁姿の住吉明神と出会い、住吉明神は遠征に参加する

（三）住吉明神、牛を投げる

（四）住吉明神、船を沖に押し出だす

（五）住吉明神、岩を射通す

（六）住吉明神、細男舞を以て磯童を召し寄せ、磯童は竜宮より借り出した旱満二珠を神功皇后に献じる

（七）神功皇后、二珠を用いて新羅軍を全滅させる

（八）神功皇后、新羅王の前で戦勝の碑文を刻む

（九）神功皇后、凱旋して筑前国で鵜羽根葺の産屋を建て、そこで応神天皇を出産する

（十）応神天皇、筥崎に戒定恵の箱を埋め、しるしの松を植える、そこに赤白八旒の幡が降る

（十一）応神天皇の御霊、宇佐の馬城峰に石躰権現となって垂迹、金色の光を放つ、仁徳天皇が勅使を派遣すると、金色の鷹となって現れる

（十二）宇佐の蓮台山寺に鍛冶の翁として現れ、大神比義の祈請に応じて三歳の稚児の姿となって竹葉の上に現れ、誉田天皇であると名乗る

（十三）和気清麻呂、称徳天皇の怒りを買って両足を切られ、鹿（乙類本では猪）に乗り宇佐八幡に参詣する

（十四）行教、八幡神を石清水に勧請する

（十五）筥崎宮創建

諸本、概ねこの構成をとる。八幡神の縁起であるが、ストーリーの半分以上が神功皇后と住吉明神のエピソードで占められており、創立縁起が詳細であるのに対して利生記が少ないことが特徴として挙げられる。現存作例は多いが、すべてが把握され報告されている状況にはない。今回確認したのは消失本等を含めて四十九本である。諸本の分類については宮次男氏の甲乙分類[2]に従う。

甲類

・出光美術館蔵二巻・元亨二年（一三二二）（以下、出光本）[3]

・飯山八幡宮蔵・永徳五年（一三八五）か

・サンフランシスコ・アジア美術館蔵一巻・康応元年（一三八九）（以下、アジア本）[4]

・鞆淵八幡神社蔵一巻（以下、鞆淵本）[5]

・逸翁美術館蔵二巻

・赤木文庫旧蔵衣奈八幡宮縁起二巻・応永九年（一四〇二）（以下、衣奈本）[6]

・日置八幡宮蔵・永享五年（一四三三）か

・国文学研究資料館蔵一巻・文正元年（一四六六）（以下、国文研文正本）

・国文学研究資料館蔵二巻・承応二年（一六五三）（以下、国文研承応本）[7]

・恒石八幡宮蔵二巻・文明一〇年（一四七八）（以下、恒石本）[8]

・椎尾八幡宮蔵二巻・文明十五年（一四八三）

・椎尾八幡宮蔵二巻・貞享四年（一六八七）

・琴崎八幡宮蔵二巻・延徳三年（一四九一）

・宮尾八幡宮蔵二巻・永正五年（一五〇八）

・浜天神社旧蔵一巻・大永七年（一五二七）

・横瀬八幡宮蔵二巻・大永七年（一五二七）

・天理大学附属天理図書館蔵二巻・享禄四年（一五三一）（以下、天理図書館本）[9]

・八幡奈多宮蔵二巻・永禄三年（一五六〇）（以下、奈多宮本）[10]

・綾木八幡宮蔵二巻・永禄四年（一五六一）

・御調八幡宮蔵角筆下絵八幡大菩薩御縁起二巻・永禄九年（一五六六）か（以下、御調本）[11]

・俵山八幡宮蔵二巻・天正九年（一五八一）

・鷹飛原八幡宮蔵鷹飛原八幡宮縁起絵二巻（以下、鷹飛原本）[12]

・防府天満宮蔵二巻（以下、防府本）

・由良湊神社蔵八幡宮通縁起（以下、由良湊本）[13]

・中京大学図書館蔵二巻・江戸前期の書写

・東原家蔵一巻・江戸前期の書写[14]

・筥崎宮蔵箱崎八幡宮縁起絵巻二巻・寛文一二年（一六七二）（以下、筥崎本）[15]
・三郷八幡神社旧蔵海南市立歴史民俗資料館蔵二巻・元禄一二年（一六九九）
・北名八幡神社蔵・正徳四年（一七一四）
・往馬大社蔵生馬八幡大菩薩絵縁起二巻・享保八年（一七二三）（以下、往馬本）[16]
・鰐鳴八幡宮蔵二巻・元文五年（一七四〇）（以下、鰐鳴本）[17]
・住吉神社蔵神功皇后縁起絵巻一巻・宝暦三年（一七五三）[18]
・秋穂正八幡宮蔵二巻[19]
・妙法寺蔵二巻（以下、妙法寺本）[20]

乙類

・宇佐神宮蔵二巻・永享五年（一四三三）江戸頃消失（以下、宇佐消失本）
・誉田八幡宮蔵神功皇后縁起二巻・永享五年（一四三三）（以下、誉田本）[21]
・石清水八幡宮蔵二巻・永享五年（一四三三）（昭和二十二年焼失）
・石清水八幡宮蔵二巻・享保一三年（一七二八）（以下、石清水享保本）[22]
・東大寺蔵二巻・天文四年（一五三五）（以下、東大寺本）[23]
・柞原八幡宮蔵由原八幡宮縁起二巻（以下、柞原本）[24]
・榊原家蔵八幡の本地二巻・寛文頃の書写（以下、榊原本）[25]
・畝火山口神社蔵神功皇后縁起絵巻二巻・天和二年（一六八二）（乙類）（以下、畝火山口本）[26]
・魚吹八幡神社蔵魚吹八幡縁起絵巻二巻[27]

不明

・石清水八幡宮蔵一巻・正応二年（一二八九）
・弘済寺蔵南方八幡宮縁起絵巻三巻
・宇佐神宮蔵八幡のえんぎ二巻・江戸時代初期[28]
・大分県立歴史博物館蔵二巻
・吉賀八幡宮蔵[29]
・宇佐八幡宮蔵[30]

八幡縁起絵巻の研究は現段階では、北野天神縁起のように転写派生本の祖本が明確でなく、「八幡縁起」の絵画化初発の作品も不明である。しかし、甲類諸本において絵巻の構成自体に大きな違いがなく、構図も類似することから、根本となったものがあると推定する。現在把握されている作例の中での最古の作例である出光本は、その奥書から播磨国より借りた本を書写したことが明らかであるため原初本には比定できない。

一、詞書

詞書[31]においては誤写、錯簡、欠損等あるが、諸本において話の構成に大きな差異はない。依拠資料として甲類には『八幡宮寺巡拝記』（以下、巡拝記）、乙類には『八幡愚童訓』（以下、愚童訓）が挙げ

られるが、甲類の中で制作年代の下るものには『愚童訓』に依拠する詞書も見られる。本稿ではアジア本、往馬本、出光本、石清水享保巻本、衣奈本、畝火山口本、誉田本、国文研文正本、国文研承応本、恒石本、天理図書館本、東大寺本、鞆淵本、筥崎本、妙法寺本、柞原本、由良湊本の十七本を中心に比較し、必要に応じて奈多宮本や鰐鳴本等も参照する。

場面（一）、（二）は使用される漢字に若干の違いはあるが、すべて十六代応神天皇が八幡大菩薩である、という文言から始まる。それに続いて応神天皇の父、仲哀天皇の御宇に新羅からの侵攻があったこと、仲哀天皇の崩御、遺勅を受けて神功皇后が三韓征伐に出発した時に老翁姿の住吉明神と出会うことが書かれる。

甲類では仲哀天皇は崩御の際、神功皇后に、懐妊の御子が男ならば龍王の聟に、女ならば嫁にするよう遺言する。

御調本、往馬本、国文研承応本は、天皇の崩御後、皇后を憑坐とした天照大神による託宣の場面を持つ。これは『愚童訓』に依拠するものである。

誉田本、石清水享保本、東大寺本、柞原本、畝火山口本等には、場面（一）において、仲哀天皇の御宇二年に新羅国より襲来した塵輪という、黒雲に乗った八つの頭を持つ赤鬼を天皇が射殺するが、自らも流れ矢に当たってしまい同九年二月六日に香椎宮で崩御する、という塵輪伝説が述べられるが、これは当該諸本を乙類に分類する基準となる場面である。諸本詞書の内容に大差なく、やはり『愚童訓』に依拠する。

水上勲氏によると塵輪に関する比較的有名なエピソードは二つあり、一つは石見、芸北地方の「石見神楽」の演目、一つは長門国下関の忌宮神社[32]の神事「数方庭」の由来譚や備前国牛窓に伝わる牛窓伝説といった地域伝承である。[33] 水上氏が塵輪伝説を有すると挙げた地は中世大内氏が支配した地であり、筥崎宮の現本殿、拝殿が大内義隆の建立であることや、厳島大願寺の尊海が義隆に、大蔵経の寄進と引き換えに宇佐神宮か筥崎宮の屋根葺を請け負う約束を交わしていること、[34] 乙類原初本への塵輪伝説採用、さらには八幡縁起絵巻が西日本、特に大内氏の支配圏であった防長地方に多く分布することからも、八幡信仰と何らかの関係があったのではないかと推測している。

場面（三）には住吉明神の霊験と牛窓の地名由来が述べられる。詞書冒頭の地名表記がアジア本、国文研文正本、恒石本、東大寺本、柞原本、往馬本、妙法寺本、由良湊本、国文研承応本では「備前」、鞆淵本、衣奈本、誉田本、天理図書館本、奈多宮本、筥崎本、石清水享保本、畝火山口本では「備後」と分かれるが、牛窓伝説の地は備前国にあるため備後は誤記とみなされる。国文研文正本における備後の「後」を消して下に「前」を書いているのは、書写する段階で間違いに気付いたためであろう。この誤記がかなり早い段階からあったことが窺える。

続く場面（四）、（五）も住吉明神の霊験が述べられる。門司の関より西、大江が崎に着いた時に海水が干上がってしまい船は進むことができなくなるが、住吉明神が一人で沖中へ船を押し出す。豊前国もしくは長門国の船木山で木を切り、宇佐郡で船を四十八艘造り、鹿嶋で乗船する。船には軍兵一千三百七十五人、大将軍は住吉、高

良大臣、舵取りは鹿嶋大明神である。葦屋津で住吉明神は十丈もある岩の先端を射貫くが、岩を射た理由について特に言及されてはいない。この二つの霊験譚は、老翁が神仏の化身である「変化の物」であるということを強調するエピソードとして挿入されたのであろう。

場面（六）は三韓征伐に必要な旱珠、満珠という二つの宝珠を龍宮から借り出すために、海の案内者である安曇磯童という者を呼び出す場面であり、続く場面（七）においてこの二珠を用いて新羅軍を破り、場面（八）の戦勝の碑文を刻むこととなる。

地名に違いが見られ、甲類は「かすい」、甲類中奈多宮本でのみ「高麗国之嶋」、乙類は「香椎」とされるが、「かすい」は香椎であると考えられる。また、奈多宮本でのみ安曇磯童が好む舞を「細男」ではなく「清海波」とする。

甲乙間における大きな違いは、甲類では磯童が龍宮に二珠を取りに行くのに対し、乙類では神功皇后の妹・豊姫が磯童の先導で龍宮に向かうことである。

場面（七）では三韓征伐について書かれているが、この場面における甲類の特徴は、異国での殺生を嘆いた神功皇后に応じて二匹の竜王が姿を現し、死人を全て食べてしまったことから、異国の死人のために放生会が始まったと述べられる点である。乙類で竜王は、満珠で以って潮が満ちた海中で日本国の船の下で船を守っていたと述べられている。二珠を借り出した後、長門国船木山で材木を調達し、豊前国宇佐で造船したこと、八幡神の本地が阿弥陀如来であること、老翁の正体が住吉明神であり、安曇磯童が筑前国鹿嶋明神であることが述べられ、神功皇后が男の姿となった描写が詳細になされる。造船のことは甲類では場面（四）ですでに述べられ、八幡神の本地については場面（十五）以降で述べられている。

場面（八）では異国に勝利した神功皇后が王達の前で「稽首八幡大菩薩　示現神通度衆生　断除十悪為十善　覆護衆生能与楽」という碑文を刻む。皇后が御鉾を王宮の門前に立てて帰朝したこと、犬追物の由来、異国を征服し誓言したのは皇后だけであること、旱満二珠は戦後肥前国佐嘉郡河上宮に納められたことが、乙類諸本にのみ書かれている。

場面（九）皇后は凱旋後筑前国で鵜羽根葺の産屋を造り、槐の木に取りついて応神天皇を出産する。乙類では槐を逆さまに立てている。逆さまに立てた槐はやがてその地に根付くことになっている。『愚童訓』でも槐を逆さまに立てているため、乙類本はこれに依る。奈多宮本は槐ではなく「アテの木」を立てるが、「アテ」はヒノキアスナロの方言であり、奈多宮本の原本である丹後一宮本がそのように表記していた可能性がある。

詞書は、十二月十四日に御誕生会という神事を行うのは御子の誕生日に由来すること、皇后の御鉾を新羅王の門前に立てたという日本記の引用、応神天皇誕生の翌年に異母兄のカコサカ、オシクマが反乱を起こしたことが述べられる。甲類では最後に、場面（一）で仲哀天皇が残した「龍王の聟になる」という約束通り、応神天皇は龍王の聟となり、備後国で生まれた若宮が仁徳天皇であること、龍王の孫であるので蛇の尾があるため、それを隠す「なおし」が作られたことに触れられている。アジア本にのみ、紀伊国に垂迹した際、

皇子時代に「広ノ湊」で船から降りたことを思い出して、伊都野山行道で座禅をしていたが深山であったため飯岡山に垂迹した、という詞書があるが飯岡山については明らかにし難い。[35]

乙類ではこの場面の最後に神功皇后の崩御と、皇后が八幡三所権現の東御前であることが述べられるが、皇后の崩御について、甲類では場面（十）の冒頭、神功皇后と地名由来譚の詞書に続いて述べられている。

鵜羽根葺の産屋で御子を出産するのは旱満二珠のエピソードとともに「海幸彦山幸彦」の影響を受けていると考えられる。[36]

甲類の場面（十）は、神功皇后と地名由来譚から始まり、仲哀天皇の崩御について日本記と扶桑記からの引用、皇后の崩御、応神天皇が山林修行の際、筑前国益富七郡の内粕屋の西郷という所に戒定恵の箱を埋めて、松枝を折って逆さまに立てたところその松が根付いて伝わっていることが述べられる。甲類でも筥崎本のように、印に松を植えたとあるが「逆さ」にしたと書かれていないものもある。

場面（十一）では仁徳天皇の御代に八幡神が初めて示現したことが述べられるが、甲類は豊前国宇佐郡本山、乙類は馬城峯と表記が異なる。両本共に、八幡神は山頂に三つの石となって金色の光を都に向けて放ったため、仁徳天皇が不審に思って勅使を派遣したところ金色の鷹となって示現したので、勅使が山麓に宝殿を造り、これが宇佐八幡宮であるということが述べられる。甲類ではこれに加えて、宇佐に入る前に穂波郡宮浦へ渡ったこと、本山で出家した後山麓で正覚をなし、その地を正覚寺と名づけたことが述べられている。また、宇佐八幡宮創建譚以降には八幡大菩薩の由来が述べられ、戒定恵の箱の底に埋められた金泥法華経一部が日本の仏法の始まりであり、聖徳太子の三粒の舎利を赤幡宮に納めたことが述べられる。

場面（十二）で八幡神は、豊前国宇佐郡蓮台寺山の麓に鍛冶をする翁の姿で示現する。欽明天皇十二年の事である。大神比義という人物がこの翁の相貌を見、ただ人ではないと考え三年間奉仕し、神明であるのならば正体を現すよう祈請すると、翁の姿は三歳の小児の姿となって竹の葉の上に乗り、自分が応神天皇であることを託宣する。衣奈本、筥崎本を除く甲類は、年代を大宮司補任帳から僧聴三年とする説を引用する。また、甲類では神功皇后、比売神と三所並んで馬城峯に石躰権現となって示現し、寒雪にも関わらず御体が暖かかったため、畏れた人々が御殿を造って覆ったところ、覆うなという託宣をするエピソードが続くが、乙類はこの詞書を欠く。乙類は比義への託宣中に「人の国よりは我国、人の人よりは我人」という言葉があり、八幡神の恵み深さを称える文言でこの段の詞書を終えている。[37]

場面（十三）も八幡神の託宣に関する話である。誉田本、畝火山口本はこの詞書を欠く。弓削道鏡の践祚に対する神意を伺いに称徳天皇が和気清麻呂を宇佐八幡宮に遣わすが、八幡神は践祚を許さず、それを伝えた清麻呂は称徳天皇の怒りを買って両足を切られ、空船に乗せられて流されてしまう。清麻呂を乗せた空船は七日七夜かけて和摩の浜に流れ着き、甲類では鹿、東大寺本、奈多宮本、柞原本では猪に乗って宇佐八幡宮に参詣する。新間水緒氏は「猪」が古い形態であり、中世の仏教説話等で「鹿」と「猪」が混同されることが多く、平仮名表記における字体類似による誤写が発生しやすいこ

とを指摘している。石清水享保本の翻刻では「猪」でなく「猿」とされているが、こちらも漢字で表記した場合に、猪と猿の崩しが類似することがあるため、書写段階もしくは翻刻の段階での誤りであると考える。

東大寺本、柞原本、石清水享保本、筥崎本では清麻呂が御殿前で涙を流すと、八幡神は「ありきつゝ来つゝみれともいさぎよき、人のこゝろを我わすれめや」という歌を詠んでいる。この歌は『愚童訓』に依るが、『袋草紙』や『新古今集』にも収載されている。[38]

場面（十四）は行教の石清水勧請の場面であるが、東大寺本、柞原本はそれぞれの勧請譚が述べられる。甲類諸本と石清水享保本、誉田本、畝火山口本には貞観の頃、行教を見込んだ八幡神は、頌を行教に授け、後に筥崎に戒定恵の箱を埋めてしるしの松を植えたこと、さらに貞観十八年の七月十五日の夜半に王城に近い石清水に自分を勧請するよう託宣することが書かれている。

乙類諸本は場面（十四）で詞書を終えるが、甲類はこの後場面（十五）に筥崎宮の創建譚と八幡の本地について述べられる。

醍醐天皇の御代に平時平という人物が、もう一度大宰大弐に任じられるよう八幡神に発願する。その際社殿を改めることを約束するが、時平は大宰大弐に再任できたにも関わらず八幡神との約束を忘れてしまう。延喜二十一年、時平に対して八幡神は、七歳の少女に憑いて託宣をする。時平は託宣に従い、しるしの松がある筥崎に社殿を造営した。この後、詞書は八幡三所権現の本地が述べられて終わる。

平時平という人物について、奈多宮本では「一人之大臣」、筥崎本の翻刻文では「藤原時平」となっているが、実在した人物であるとは考えにくい。[39] 金光哲氏は「平時平」譚の依拠資料に「筥崎宮縁起」を挙げており、それによると、「平時平」という人物は「平真材」であるとされている。

アジア本には所蔵来歴に繋がる可能性の高い飯岡山垂迹譚が述べられ、奈多宮本には方言が窺え、東大寺本と柞原本はそれぞれの八幡宮創立縁起を有する等、地域性が絵巻に反映されている場合がある。また、これは金氏も指摘されているが、衣奈本は上巻に一般に八幡縁起絵巻に書かれる詞書を、下巻に衣奈八幡宮の縁起を書くため詞書に省略が見られる。さらに、御調本、国文研承応本には、仲哀天皇崩御の段と三韓出征出発の間に天照大神が神功皇后に憑いて託宣をする詞書があり、金氏はこれを甲類「狂女」系と称し、上巻冒頭の狂女の詞書を欠いていたとしても、下巻の詞書に「石躰権現出現と金鷹出現の間に、馬城峰に石躰で三所権現として示現した詞書が入る」、「和気清麻呂宇佐参詣の場面冒頭文に『宇佐』がある」という二点を備えたものであれば甲類「狂女」系に分類し得るとされた。よって今回の諸本比較から、往馬本には狂女の詞書が、恒石本下巻には金氏が指摘する詞書の特徴があり、この二本も狂女系であることが明らかとなった。

二、絵

絵においても詞書と同様、諸本に大きな差異はない。特に甲類諸本は奥書や記録が残されておらず、その大半が模写であり、また素

朴且つ大胆な筆致で描かれているため、描き手や制作年代の特定は困難を極める。本稿では全図確認し得たアジア本、出光本、衣奈本、畝火山口本、誉田本、国文研文正本、鷹飛原本、恒石本、東大寺本、鞆淵本、筥崎本、防府本、妙法寺本、柞原本、由良湊本の十四本に加え、往馬本、石清水享保本、御調本、鰐鳴本等参照する。

場面（一）、（二）は、乙類は黒雲に乗る塵輪と落ちる首、弓を持つ仲哀天皇の絵から始まる。続いて神功皇后の姿は描かれていないものの、彼女が乗っていると見られる輿と護衛等が門から出発し、その前方に立つ老翁姿の住吉明神が描かれている。

甲類は皇后の輿が門から出る図から始まる。輿に先行する人物に若干の違いがあり、出光本、アジア本、鞆淵本は先頭の人物が榊を、続く人物が鉾を捧げ持ち、徒歩の二人、その後ろに輿が続く。国文研文正本、鷹飛原本、恒石本、防府本、鰐鳴本は先頭の人物が榊を、続く人物が鉾を持つ、というのは他甲類と変わらないが、鉾を持つ人物は手向山八幡宮蔵「転害会図絵」等に見られる王の舞の鼻高面を被っている。誉田本では先行する人物十人はみな同じ装束を纏って顔を白布で隠し、それぞれ鉾を持っている。東大寺本では先頭の人物が榊と幣を、後ろの二人が鉾を捧げ持つ。輿の手前では住吉明神と対面する人物が描かれる。また、筥崎本のみ逆行する構図で描かれている。

乙類で描かれる塵輪について、東大寺本、柞原本で描かれる塵輪は有角、八頭の赤鬼であり、頭部は承久本「北野天神縁起」に描かれる多頭の牛頭に近く（図1）、誉田本、畝火山口本の塵輪には角がない。誉田本、東大寺本、畝火山口本が時間軸に沿って御所から始まり塵輪の首が落とされる場面で終わるのに対し、柞原本は塵輪の首が落ちる絵から始まる。この本にのみ時間の逆行表現による工夫が見られる。

場面（三）には諸本共通して皇后の乗る船と、その端に立って構えている住吉明神が描かれる。その対面に、甲類では襲い掛かってくる牛が、乙類ではひっくり返された牛が、それぞれ描かれている（図2）。甲類中、御調本にのみ、乙類と同様の構図が見られる。また、乙類では榊原本にのみ、住吉明神に角を掴まれている牛が描かれる。

船を押し出す場面（四）について、従来この場面を描いた本は乙類に分類されたが、甲類と考えられる往馬本、御調本、恒石本にもこの場面が描かれており（図3）、船の形や船上の二人の人物、住吉明神のポーズが酷似している。場面（五）において、宮氏は岩のある場所に注目し、甲類は陸上の岩であり、乙類は海中の岩であるという差異を指摘するが、ここでは矢の状態に注目したい。矢が岩に刺さっている状態である本と矢が描かれていない本は甲乙どちらの本にも見られる表現であるが、国文研文正本、御調本、鷹飛原本、恒石本、鰐鳴本では、矢が岩を貫通して後方に飛んで行く様子が描かれており（図4）、これらは全て甲類である。乙類では場面（四）、（五）は連続して描かれている。

場面（六）に登場する安曇磯童の描き方は甲乙で分かれる。甲類の多くは龍首の付いた船に乗って二珠の付いた枝を捧げ持った女性か童子を描くのに対し、乙類は亀の甲に乗り、顔を白布で隠して鼓を首から下げた男性が描かれている（図5）。乙類で描かれる磯童[40]

は大善寺玉垂宮蔵「玉垂宮縁起絵」、高良大社蔵「高良大社縁起」等の掛幅本と類似する。乙類中石清水享保本のみ、亀の甲に乗って頭に鼓を乗せた女性もしくは童子が描かれている。

物語の時間軸通りに描くならば、住吉明神が磯童と共に細男舞を舞う場面、その次に磯童が龍宮から玉を借り出して献上する場面が正しいが、甲類は細男舞を舞う住吉明神と、二珠を献上する磯童を同一画面上に描いている。妙法寺本のみ、細男舞を舞う住吉明神と龍頭付の小船に乗り鼓を持った安曇磯童、弓矢を携えた住吉明神と龍頭付の小船に乗り二珠を盆に乗せた安曇磯童の二場面に分けている。これは丹緑本『八幡の御本地』（以下、丹緑本）[41]と同様の構成である。また、筥崎本の舞台上の人物は顔を四角い白布で隠しており、下原美保氏はこの人物が安曇磯童であり、対面し海上で二珠を献じるのは豊姫であるとする。筥崎本は特に上巻の詞書を失っているため、この場面についてどのように書かれていたかは定かでないが、乙類の詞書にはこの白布の理由が説明されており、これは後世の細男舞の姿であることが分かるので、舞台上には後世の細男舞の衣装を着けた住吉明神が描かれていると考える。

場面（七）では異国の兵士の描き方が異なり、アジア本、鞆淵本、衣奈本、誉田本、東大寺本、柞原本、畝火山口本、由良湊本の軍兵は「蒙古襲来絵詞」に描かれる蒙古軍の姿に近い。国文研文正本、恒石本、往馬本、鷹飛原本、御調本、防府本の軍兵は前述の兵に交じって九州国立博物館蔵「南蛮船駿河湾来航図屏風」に描かれる人物に近い衣服をまとった兵を描く。逸翁本、妙法寺本には承久本「北野天神縁起」に描かれる異形のものに似た軍兵が描かれる（図6）。神功皇后が戦勝の碑文を刻む場面（八）で描かれる皇后の構図は、武装した姿であるアジア本、鞆淵本、衣奈本、東大寺本、柞原本、畝火山口本、由良湊本、武装し虎皮の上に立っている国文研文正本、恒石本、御調本、鷹飛原本、防府本、鰐鳴本、武装し馬に乗る筥崎本、妙法寺本の三つに分かれる（図7）。虎皮を敷くという構図は、異国の神を調伏したことを象徴しているとも取れるが、「熊野の本地」の五衰殿女御と御子の下にも見られることから[42]、高貴な女性もしくは母子信仰と関わりのある構図ではないかと、現段階では推測している。アジア本には、この場面（八）、（九）の間に海辺に面した境内が描かれる。この絵について、これは詞書の飯岡山垂迹に対する絵であり、そこに創建された八幡神社の境内図であるという見方と、宮氏が指摘する、場面（十五）の筥崎宮の境内図を描いた絵であるという見方がある[43]。

場面（九）の産屋も本によって形状が異なる（図8）。国文研文正本、恒石本、御調本、鷹飛原本、鰐鳴本は屋根の鵜羽根が葺きかけの状態である。妙法寺本の産屋は六角堂のような形をしているが、これは丹緑本の産屋と類似する。

場面（十）には八幡が筥崎のしるしの松に降下する様子が描かれる。甲類では根が上にある逆さ松の両脇に赤白の幡が四旒ずつ描かれ、乙類は井垣を廻らせた松の周りに赤白の幡が四旒ずつ舞い降りる様子が描かれている。

場面（十一）は、甲類では岩上の金鷹、乙類ではそれに加えて勅使一行の姿が描かれている。甲類中では若干の違いが見られ、御調本、恒石本には鷹の前に宝殿と思しき建物が描かれている。また、

鷹飛原本、防府本、鰐鳴本では山上に三つの岩が並び、中央の岩上に金鷹、その足元、岩の頂上から光線が出ている。この光線を描くという構図は鞆淵本にも見られる。場面（十）、（十一）には時間軸の逆転が見られ、同一画面上に（十一）、（十）の順に描かれている。

場面（十二）には同一画面上に、鍛冶する翁の姿の八幡神と幣帛を持つ大神比義と、竹葉の上に顕れた三歳の小児と幣帛をもつ比義が描かれる。竹葉の上から神が託宣をする場面は「春日権現験記絵」にも見られる。[44] 諸本概ね同じ構図で描かれるが、詞書で「甚だ奇異」とされる鍛冶の翁の相貌が奇異には描かれていない。翁の奇異な相貌というのは、『八幡宇佐御託宣記』[45] に鍛冶の翁は「八頭」であったという記載があることからこのことを指すと考えられるが、絵巻中八頭に描かれるのは乙類の塵輪のみである。諸本の相違点として三歳の小児の姿が挙げられる。出光本、アジア本、鞆淵本、石清水享保本、妙法寺本の小児は赤い腰巻を身に着けて垂髪を持つ。筥崎本も垂髪であるが腰巻でなく白い衣を着ている。一方衣奈本、誉田本、国文研文正本、恒石本、東大寺本、柞原本、鷹飛原本、御調本、防府本の小児は赤い腰巻を付けるが毛髪を持たない、合掌する僧形に描かれている。僧形の小児の図像は「聖徳太子絵伝」中に描かれる聖徳太子二歳の図像である「南無仏太子像」に酷似している（図9）。

場面（十三）は流罪となった和気清麻呂が漂着し、宇佐神宮へと向かう図が描かれる。甲類では社殿に向かう僧侶と鹿に乗る清麻呂を描いているのに対して、東大寺本、柞原本では画面右手に猪に乗った清麻呂が、左手に社殿から出てきた小さな蛇と向かい合う清麻呂が描かれている。妙法寺本も、東大寺、柞原本の構図と同様に、画面右手に鹿に乗る清麻呂が、左手に社殿から出てきた蛇に足を舐められている姿が描かれている。構図は共通するが、妙法寺本の蛇は小蛇ではなく龍に似た大蛇が、足を舐めるというよりは寧ろ銜える状態で描かれている（図10）。これは丹緑本の構図と同様である。

場面（十四）、（十五）は行教が八幡神の託宣を受けて男山に勧請する場面と筥崎宮の創建譚となる。甲類諸本は画面右手から塔と山々があり、左手に宇佐神宮とその前に座す行教という構図で描かれる。筥崎本にのみ、山中で神託を得る行教の絵と八幡神が女児に憑いて平時平の元へ飛来し託宣を行う絵がある。往馬本、御調本、恒石本は画面右手から宇佐神宮と行教、池を挟んでもう一つ建物が描かれている。乙類の誉田本には、貞観年中の宇佐神宮の景観と石清水八幡宮の境内が描かれている。

未見の箇所もあるが、往馬本、御調本、恒石本の三本は構図が酷似しており、詞書においても狂女系に分類され得ることからも、同系統の本から模写したと考えられる。また、国文研文正本、鷹飛原本、防府本、鰐鳴本は住吉明神の岩を射抜いた鏑矢が岩の後方に飛んで行く様子が描かれている点、軍兵の姿、戦勝の碑文を刻む場面で神功皇后が虎皮の上に立っているという点、産屋の屋根の鵜羽根が葺きかけである点はこの三本と同様である。

妙法寺本には産屋の形状、場面構成等他の甲類本と異なる点がある。これらは丹緑本に類似する絵画表現、場面構成である。この他、妙法寺本に描かれる軍船の形状は御座船や能の作物のようであり、祭の時の神楽か、何かしらの演目が絵巻に反映されているのではないかと推測する。詞書の一部に読点やふりがな、濁点がある等後世

記号を加筆したとみられ、妙法寺本が音楽と併せて用いられ、唱導や説経、祭等の神事の関与を考察する上で重要な特徴を持つと考えている。また、妙法寺本や榊原本には神功皇后の姿が他本と比べて多く描かれており、これは絵巻の年代を特定する上で注目すべき点であると見ている。

甲類諸本は同様の構図を持つ本や角筆による下絵の痕跡が見られる本があり、原本に忠実に模写していることが分かるが、乙類諸本は従来の八幡縁起絵巻を参考にしながらもそれぞれの絵師による工夫が見られる。

おわりに

以上、八幡縁起絵巻の確認し得る諸本を挙げ、その詞書及び絵に見られる諸本間の異同について概観した。本稿は八幡縁起絵巻研究の基礎的作業を目指したものである。

本稿によって従来指摘されている甲乙分類については、おおよそ首肯できるものであることが確認できたが、宮次男氏が指摘した逸翁本、天理本以外にも、御調本、恒石本、筥崎本等が甲類に分類されながらも乙類の特質を部分的に共有することが判明した。これらの諸本の成立の様相を明らかにすることは、八幡縁起絵巻の成立を考察する上で重要な過程であると考える。

また三韓征伐の場面において、異国の兵の描き方に「蒙古襲来絵詞」や「南蛮船駿河来航図屏風」、承久本「北野天神縁起」等と共通性が認められることが明らかとなった。このことは、従来困難とされてきた八幡縁起絵巻の様式的研究の端緒を開く論点であり、制作時期や画家の問題等も含めて今後の課題としたい。

註

(1) 本絵巻に関する主要参考文献は以下の通り
・中野玄三『続々日本仏教美術史研究』思文閣出版（二〇〇八）二四頁～三五頁
・松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂（一九八二）一一三、一一四頁
・宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上・中・下、附載一・二『美術研究』（一九八五～七）三三三、三三五、三三六、三三九、三四〇頁

(2) 宮「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」

(3) 出光美術館『館蔵名品選』第二集（一九九一）

(4) 島田修二郎編「天神縁起絵巻・八幡縁起・天稚彦草紙・鼠草紙・化物草子・うたたね草紙」『新修日本絵巻物全集　別巻二』角川書店（一九八一）

(5) 和歌山県立博物館編集『歴史のなかの〝ともぶち〟―鞆淵八幡と鞆淵荘―』（二〇〇一）

(6) 由良町誌編修委員会『由良町誌』由良町（一九九一）

(7) 神道大系編纂会『神道大系』文学編二

(8) 小林芳樹「資料紹介　恒石八幡宮蔵八幡大菩薩御縁起」『内海文化研究紀要』第二二号・広島大学文学部内海文化研究施設（一九九三）

(9) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十／角川書店（一九八二）

(10) 絵・存麟、詞・存益。『宇佐・国東半島を中心とする文化財』文化財集中地区特別総合調査報告〈第七集〉文化庁（一九六九）

(11) 中野幡能編『八幡信仰事典』戎光祥出版（二〇〇二）一一八頁～一六三頁

(12) 中野『八幡信仰事典』一一八頁～一六三頁

(13) 神道大系編纂会『神道大系』神社編四十一、紀伊・淡路国

(14) 黒田彰、坪井直子、筒井大祐「東原本八幡大菩薩御縁起（上巻）：影印、翻刻」『京都語文』十七巻

(15) 絵・住吉具慶、詞書・久我廣通以下十六名、下原美保「筥崎宮蔵「箱崎八幡宮縁起」についてI―一―現状と詞書の検討」「I―二―図様の検討」『日本美術工芸』（一九九五）六八二、六八三頁

(16) 奥書に、康正二年（一四五六）従五位下左近衛将監源武康による奉納の模写とある。生駒市誌編纂委員会編『生駒市誌』資料編一／生駒市（一九七一～一九八五）

(17) 黒田彰、坪井直子、筒井大祐「鰐鳴八幡宮本八幡大菩薩御縁起：影印、翻刻」『京都語文』十八巻・佛教大学（二〇一一）

(18) 『下東条の古代中世と住吉神社信仰』小野市立好古館（二〇一二）
住吉神社本は他本と違って八幡縁起絵巻の上巻に当たる部分の絵のみで構成された絵巻であり、絵解きに使われたのではないかと考えている。

(19) 黒田彰、筒井大祐「秋穂正八幡宮本八幡大菩薩御縁起：影印、翻刻」『京都語文』上巻十九巻（二〇一三）、下巻二十巻・佛教大学（二〇一四）

(20) 大山明彦氏の撮影（平成二十三年六月十二日の調査）／山岸公基氏との共同翻刻　奈良教育大学大学院「地域と伝統文化」教育プログラム編『神仏習合展―私たちの奈良　信仰のかたち―』

(21) 奥書から、足利義教の奉納本であることが知られる。絵・土佐光信、詞・足利義教とされる。羽曳野市文化財編『絵巻物集』（一九九一）に、同時に奉納された誉田宗廟縁起とともに全図掲載されている。

(22) 正応二年の一巻本については石清水八幡宮へ問い合わせたところ「専門家の方に調査してもらった結果、正応二年作と断定するのは難しく、訂そう（御返事原文のまま）・紙質から考えると、実際はもっと下った時代のものである可能性が高い（室町中期以降）」と御回答頂いた。永享五年の二巻本は誉田本同様足利義教奉納本であり絵・土佐光信、詞・足利義教とされるものであるが、昭和二十二年の社務所火災の折に焼失しており、現存する享保十三年の二巻本がその模写作品であるとされている。享保の模写本の翻刻は『古典文庫』（正）第三十八巻「中世神仏説話」（一九五〇）に所収。

(23) 奥書に絵・宗軒、詞・寺務公順とある。『社寺縁起絵』奈良国立博物館（一九七五）

(24) 絵・土佐光茂、詞・青蓮院尊鎮親王とされる。渡辺文雄「伝土佐光茂筆　大分由原八幡宮縁起絵巻について」『歴史民俗資料館研究紀要』vol.2・大分県立宇佐風土記の会（一九八五）、中野『八幡信仰事典』

(25) 黒田彰、坪井直子、筒井大祐「榊原本　八幡の本地：影印、翻刻」『文学部論集』上巻九十五巻（二〇一一）、下巻96巻・佛教大学（二〇一二）

(26) 奥書に長谷川等伯の曾孫、雪且（旦）の写とある。小林写真工業株式会社製作『神功皇后縁起絵巻：畝火山口神社絵図』（二〇〇一）

(27) 木村朗子「東アジア海域文化圏における伝承と物語―岡山県邑久郡牛窓神社を中心に―」二〇一〇年度　瀬戸内海文化調査

(28) 中野『八幡信仰事典』には三韓征伐の場面（三六二頁）が掲載されており、二匹の龍と異形の姿の異国の兵が海上に描かれている。ホームページの収蔵品一覧には「紙本著色八幡縁起絵」（上・下巻）と記載されている。

(29) 中野『八幡信仰事典』に山口県菊川町吉賀八幡宮の所蔵とされるが詳細は不明である。細男舞の場面（三六〇頁）と神功皇后が戦勝の碑文を刻む場面（三六三頁）、和気清麻呂の宇佐参詣の場面（三六九頁）が掲載されている。神功皇后の足元に虎皮が敷かれていること、清麻呂が猪に乗っていることは注目すべき点である。

(30) 中野『八幡信仰事典』に山口県防府市宇佐八幡宮の所蔵とされるが詳細は不明である。住吉明神が岩を射抜く場面（三五八頁）と和気清麻呂の宇佐参詣の場面（三六九頁）が掲載されている。住吉明神は陸上から海上の岩を鏑矢で射抜いている。

(31) 詞書における主要参考文献は以下の通り
・新間水緒『神仏説話と説話集の研究』（二〇〇八）
・金光哲「研究ノート「八幡縁起絵巻」―八幡大菩薩御縁起と足利義教奉納本―」『東アジア研究』第十八号（一九九七）
・筒井大祐「研究ノート　八幡縁起絵巻と『八幡宮寺巡拝記』」『京都語文』

第十九号・仏教大学国語国文学会（二〇一二）

(32) 式内社。長門国二の宮。仲哀天皇が神功皇后と共に建立した豊浦宮の故地であるとされる。

(33) 水上勲「《塵輪》《牛鬼》伝説考―「新羅」来襲伝説と瀬戸内の妖怪伝承―」『帝塚山大学人文科学部紀要』第十八号・二〇〇五）

『本朝神社考』には皇后らの船を襲った牛は塵輪の化身であるという記事が見られる。

神功皇后の舟備前の海上を過ぐ。時に大牛有り。出で、舟を覆さむと欲す。住吉明神、老翁と化して、その角を以て投げ倒す。故に其処を名づけて牛転といふ。今牛窓といふは訛なり。其の牛は蓋し塵輪鬼の化する所なり。塵輪八の頭あり。嘗て黒雲に駕り来たりて仲哀帝を侵す。帝之を射る。身首二と為りて落死す。塵輪も亦帝を射る。帝遂に崩ず。「本朝神社考」『神社縁起』日本庶民生活史料集成第二六巻（一九八三）

金「研究ノート「八幡縁起絵巻」」で「牛窓」の牛を「塵輪」の化したもの、とするのは林羅山の創作であると述べている。また、水上氏は『本朝神社考』の記事とほぼ同一の内容でありながら「塵輪」の登場しない、康応元年（一三八九）成立の今川了俊『鹿苑院殿厳島参詣記』を引き、この時期から『本朝神社考』成立時期（寛永年間）の間に「塵輪」の伝承が加わったことから、塵輪伝説の成立時期を推定し得る材料となる可能性を指摘している。

水上氏は触れていないが、福岡県の大善寺玉垂宮には仁徳天皇五六年（三六八）に勅命により藤大臣（高良明神）が肥前水上の桜桃沈輪［ユスラチンリン］を討伐したことを起源とする、鬼夜という火祭りがある。

また、甲類本詞書中、本稿における場面（十）に、仲哀天皇の崩御について日本記を引く文があるが、その後に「或説云、眼のあたり、異国の矢にあたりて崩御し給云々」という一文があり、これは『巡拝記』にも見られる。

(34) 須田牧子『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会（二〇一一）

(35) 詞書中に「伊都野」とあるため、飯岡山は紀伊国にあるのではないかと推測し、一つ目の候補として「伊都野庄」、現在の伊都郡の内にあったと考えられる平安時代の荘園を検討した。紀伊国には石清水八幡宮領の荘園に勧請された八幡神社が多く存在し、伊都郡隅田荘の隅田八幡宮、那賀郡鞆淵荘、鞆淵八幡神社、同郡野上荘の野上八幡宮等がある。「伊都野庄」も早期に石清水八幡宮の宿院極楽寺の院主に領掌させるよう命じられている。二つ目の候補として「いとの」もしくは「いとか」という地名を検討した。現和歌山県有田郡有田川町に「糸野」があり、同県有田市には「糸我」町があるが、今回は上記の地に「飯岡山」という山を見付けることは叶わなかった。

(36) 吉田修作『憑り来ることばと伝承―託宣・神功皇后・地域』おうふう（二〇〇八）より、神功皇后は応神天皇を身籠ったまま対馬から異国へ行き、そのまま対馬に帰還したことから、対馬では神功母子はトヨタマヒメ、ウガヤフキアエズノミコトと重なる、海から憑り来る母子神と見なされた。

(37) 宮氏は筥崎創建を描いた「平時平」の段の詞書にある「宝社造営ヨリ以来タ三百余歳ニ及ヘリ」から、筥崎宮創建の延喜二十一年（九二一）に「三百余歳」を足した承久三年（一二二一）以降若干年を甲類成立時期としていたが、金光哲氏は宮氏の提示する「平時平」のストーリーは『諸縁起』所収の「筥崎宮縁起」に依るものであり、「人間の苦しみは我苦しみなり」という文言が『愚童訓』（甲本）にもあることから、この段は『愚童訓』（甲本）からの影響が考えられるため、甲類本全体の成立は『愚童訓』（甲本）成立後であるとし、それに対して筒井大祐氏は、金氏が指摘する文言はより成立時期の古い『巡拝記』にも見え、新間氏の、甲類詞書が『巡拝記』と共通説話を持つという指摘を前提として、甲類詞書と『巡拝記』の比較により両者の直接的関係を検討し、甲類本が『巡拝記』に依拠して成立したとした。そのため筒井氏は、甲類本成立は『巡拝記』編纂以降、八幡縁起絵巻最古の作例、出光本奥書の元享元年（一三二一）までの約六十年間であると述べている。また、乙類本成立年代は、宮氏も指摘する、永享五年（一四三三）に足利義教が奉納した石清水焼失本、誉田本、宇佐消失本の三本が原初本であると考える。

(38) 『袋草紙』上巻は保元二～三年（一一五七～五八）に成立したとされる。歌は「ありきつつ来つつみれどもいさぎよき君が心をわれわすれめや」であり、

絵巻で「人の心」とある箇所が「君が心」となっている。詞書に「これは、孝謙天皇弓削法皇に位を譲らんとて、和気清麿を使となして宇佐宮に申さしめ給ふの時、帰り来て許さざるの由を奏す。仍りて法皇怒りて、清麿の足を切りてうつぼ舟に乗せて流す。時に宇佐宮に流れ寄れり。かの神、清麿が清廉をあはれみて、この歌を誦して清麿の膝を撫で給ひし時に、足満足すと云々。今の和気氏の祖なり」とある。『新古今集』の巻第十九神祇歌では歌は絵巻と同様であり、詞書に「石清水御歌といへり」とある。

(39) 『公卿補任』には「平時平」の記載があるが、それは平経高の本名であり、時代、職業ともに筥崎宮創建者に該当しない。

(40) 但し逸翁本、天理図書館本は船に乗って笏を持つ女性と、船の後ろに海中から半身を出し、盆の上に二珠を捧げ持つ人物が描かれている。この二人の人物については、宮氏は詞書にはない豊姫と磯童を描いたものとしているが、女性と見られる船上の人物の服装が唐装のようでもあり、逸翁本、天理図書館本の全図入手時の研究の課題としたい。

(41) 東京大学文学部国文学研究室所蔵、丹緑本、上中下三冊（横山重、太田武夫『室町時代物語集』第一・井上書房（一九六二）

(42) 「熊野の本地」の類で五衰殿の女御と御子の下に虎皮を敷く図は逸翁美術館蔵「熊野本地絵巻」、国立国会図書館蔵「くまのゝほんち」（寛永末から正保頃）、駒澤大学蔵「熊野の本地」三巻等に見られる。

(43) 宮「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」

(44) 中野幡能氏は「竹の葉の上に顕れる」というシャマニズムは、日本では見られないものであり、辛嶋氏の新羅系神話、韓国シャマニズムの影響であるとしている 中野幡能　著『八幡信仰と修験道』吉川弘文館（二〇〇八）

(45) 重松明久『八幡宇佐宮御託宣集』一八〇、一八一頁

一。金剌宮御宇二十九年戊子。

筑紫豊前国宇佐郡菱形池辺。小倉山之麓。有鍛冶之翁。帯奇異之瑞。為一身現八頭。人聞之為実見行時。五人行。即三人死。十人行。即五人死。故成恐怖。無行人。於是大神比義・見之。更無人。但金色鷹在林上。致丹祈之誠。問根本云。誰之成変乎。君之所為歟。忽化金色鳩。飛来居袂上。爰知神変可利人中。然間比義断五穀。経三年之後。同天皇三十二年辛卯二月十日癸卯。捧幣傾首申。若於為神者。可顕我前。即現三歳少児於竹葉上宣。

一云。豊前国宇佐郡大尾山麓。有為鍛冶之翁。其相貌甚奇異也。依之大神比義断五穀已三年之間給仕。即捧御幣祈請云。我迄三年断五穀。籠居令給仕之者。其相貌非直人也之故也。若為神者。我前可現給。即顕三歳少児立竹葉宣。

引用図版

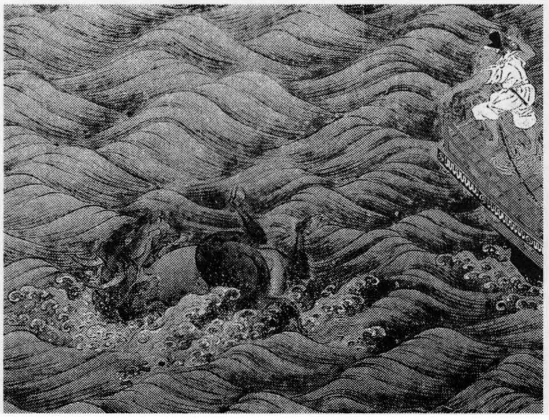
アジア本：島田修二郎編「天神縁起絵巻・八幡縁起・天稚彦草紙・鼠草紙・化物草子・うたたね草紙」『新修日本絵巻物全集　別巻二』角川書店（一九八一）、鞆淵本：和歌山県立博物館編集『歴史のなかの〝ともぶち〟―鞆淵八幡と鞆淵荘―』（二〇〇一）、誉田本：羽曳野市文化財編『絵巻物集』（一九九一）、柞原本・御調本（部分）：中野幡能編『八幡信仰事典』戎光祥出版（二〇〇二）一一八頁～一六三頁、妙法寺本：奈良教育大学大学院「地域と伝統文化」教育プログラム編『神仏習合展―私たちの奈良　信仰のかたち―』、承久本「北野天神縁起」：須賀みほ『天神縁起の系譜』中央公論美術出版（二〇〇四）、南無仏太子像：『聖徳太子ゆかりの名宝　河内三太子　叡福寺、野中寺、大聖勝軍寺』大阪市立美術館（二〇〇八）

田中水萌（たなか・みずほ）
二〇一二年　奈良教育大学教育学部卒業
二〇一四年　奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程修了
現在、神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程に研究生として在籍

1−2 承久本「北野天神縁起」

1−1 柞原本の塵輪

図 1



2−2 誉田本

2−1 アジア本

図 2

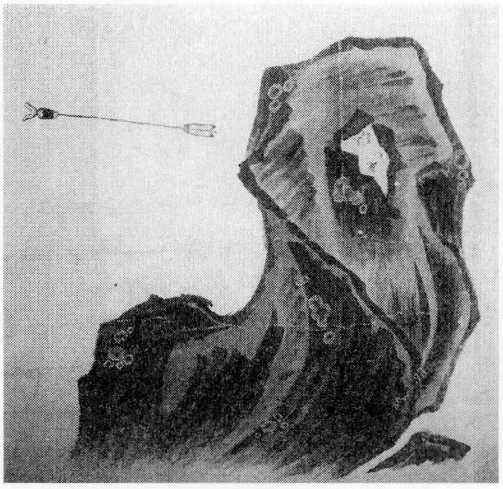


図４　御調本

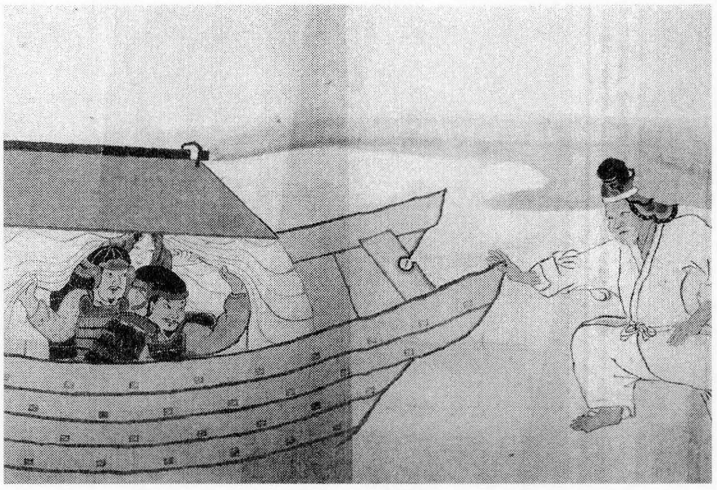
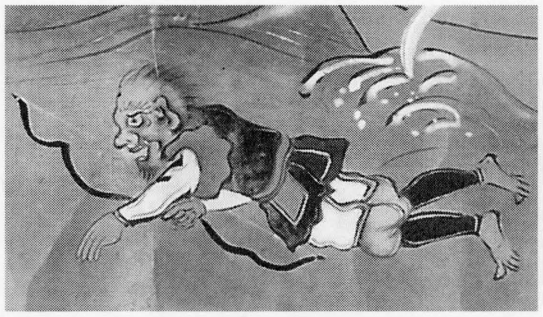


図３　御調本

５−２誉田本

５−１アジア本

図５



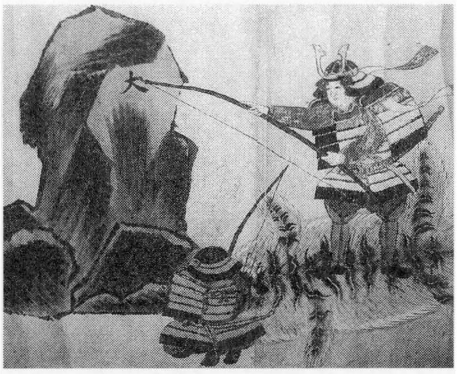
6−3 妙法寺本

6−2 御調本

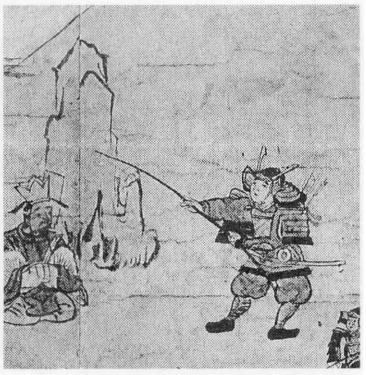
6−1 アジア本

図 6

7 − 3 妙法寺

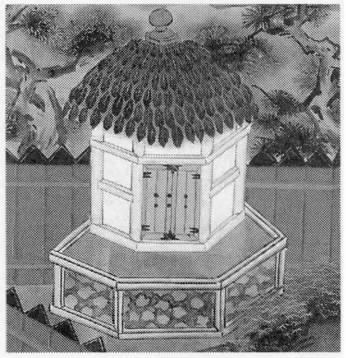


7 − 2 御調本

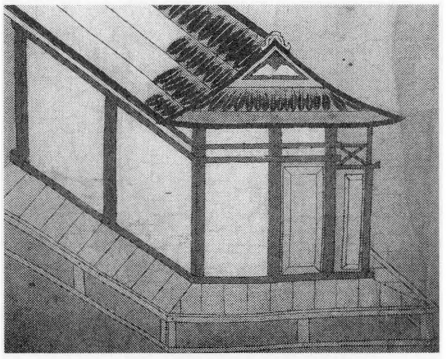


7 − 1 アジア本

図 7



8−3 妙法寺本



8−2 御調本

8−1 鞆淵本

図 8　産屋

9−3 南無仏太子像

9−2 誉田本

9−1 アジア本

図 9　三歳の小児の姿と南無仏太子像

10−2 妙法寺本

10−1 柞原本

図 10